

<分担研究報告>

乳幼児期からの情緒の形成に関する研究

分担研究者 清 水 凡 生

要 約

子どもの温かく豊かな情緒形成には、母親の「愛他真」、「向社会的」、「道徳性」、「良心」などが大きな効果を有することが認められた。しかし、育児困難のために子どもとの共感をもちえない母親の多いことが示され、この問題解決の必要性が示唆された。思春期保健福祉体験学習が父性母性の涵養に効果的であることが明らかにされ、将来親となる思春期世代の育成によって、次世代の子どもの情緒形成に貢献すると思われる。また、対人関係が希薄な子どもの早期発見に1歳6か月時の健診における「応答の指さし」の測定が有効であることが示された。

見出し語

思いやり 向社会的行動 共感性 愛着 育児困難 対人関係 応答の指さし 情緒の定量的測定 保健福祉体験学習 父性 母性

■ 幼児期の母子関係と思いやりの形成

子どもの思いやりは、環境との相互作用の中で形成される。特に、子どもにとって大切な人とのかわりの中で、その人からやさしく受け入れてもらえるかどうかということと、その人がどのようなモデルとなっているかが重要である。このような相互作用とモデリングという視点から、母親の養育ストラテジーや養育態度、思いやりやその動機が幼児の思いやりの形成にどのような影響を与えるかについて検討した。

その結果、4歳児と5歳児の思いやりの形成に対して母親の影響の仕方が異なるということが推測された。4歳児では、母親の「愛他心」や「良心」が女兒の思いやりの形成に影響を与える。5歳児の場合、男女の思いやりの形成に対して、母親の「力中心ストラテジー」はマイナスの効果を、「共感性」はプラスの効果をもたらすのではないかと。さらに、5歳男児の場合、母親の「向社会的」「愛他心」「道

徳観」が思いやりの形成にプラスの影響を与える可能性がある。

■ 乳幼児の思いやり行動と家族の共感関係の検討

近年、母子関係の質や母親の育児ストレスが母親の要因だけに規定されるのではなく、夫婦関係や家族の育児体制のあり方といった家族の要因に影響を受けることが報告されてきた。幼児の思いやり行動と母子間の愛着との間に何らかの関連性が認められたとしても、それが父子関係や夫婦関係などの家族の多様な関係の複合的な結果であることも考えられる。

今回の研究によって、幼児期における母子間の安定した愛着が良好な仲間関係と関連することを示唆し、母親に愛される経験が他者への思いやりにつながるということが示された。安定愛着は自己の攻撃的な衝動を制御することと関係し、不安定

愛着は他者からの挑発に伴うマイナスの情動を制御できず、正当な自己主張方略が採れないことと関係するものと思われる。さらに、愛着の不安定さが幼児を仲間遊びから遠ざけ、向社会的行動の機会と学習のチャンスを失わせたことを示唆する結果をも得た。

また、子どもの共感性の発達がいやりの行動の発達を左右する要因であることが以前から指摘されているが、子どもは親から共感的な養育を受け、親同士の共感的なかわりを観察することを通して、他者と共感的にかかわろうとする動機づけと行動スキルを発達させるものと思われる結果が得られた。思いやり行動は自己制御された行動であることから、今後、自己意識の芽生えるころ（1歳半程度）の幼児を対象に家族の共感関係と幼児の思いやり行動の発達との関連を検討することが課題である。

■ 乳幼児期における情緒発達の定量的研究

サーモグラフィーで乳児の顔面皮膚温度の変化を計測するという方法で、乳児の情動の定量評価をおこなった。その結果、生後2カ月から4カ月という、それまでの研究で得られた結果よりも早い時期に、乳児は母親に対する愛着を形成していることが明らかになった。また、皮膚温、心拍数などの生理指標を用いて、父子相互作用による乳児の父親に対する愛着形成を、母親に対するそれと比較しつつ定量評価したところ、父子分離の際とStrangerが存在する際に、乳児の体温の低下が記録された。父子分離による体温の低下は、父親との再会によって上昇に転じたが、父子分離状態でStrangerが存在すると、乳児の体温は低下しつづけ、その後父親が戻ってきてもなかなか上昇しなかった。このことから、乳児はすでに父親に対して愛着を形成しており、父親を安全基盤としているが、他者が存在するというストレスは、それを揺るがせるほど強いものであると考えられる。なお、心拍の変化もまた、それを裏付けるものであった。

また、音楽による母子共感関係の形成、コンパニオンアニマルとのふれあいが子どもたちにもたらす身体的、精神的効果などについても検討するために予備実験を行ったが、現在計画している方法で十分所期の目的が得られることが示唆された。

■ 乳幼児をもつ母親の育児困難

昨今、育児に困難を覚え、子どもの行動に苛立ちを強める母親が急増している。乳幼児にとって、もっとも身近で頼るべき親が情緒的に不安定な状況にいることは、乳幼児の心身の発達を考えるときゆゆしいものがあり、その対策が急務と考えられる。

今日の母親たちが直面している育児困難状況とその背景要因を検討し、さらに、イギリスにおける調査結果と比較した。母親が直面している育児困難には、依然として母親が一人で育児の大半を担っている状況が明らかであった。母親を対象とした育児支援がさらに進められていく必要性が高い。とりわけ、子どものもう一人の親である父親の育児参加に関しては、近年、その必要性が各方面で指摘されているように、その推進の意味が大きい。しかし、今回明らかにした点は、父親が育児に参加する意義は、育児参加を通して夫婦間の精神的な対等性、および情緒的な絆が確立されてこそ意義があると考えられることである。この点はイギリスの母親を対象とした比較調査において明らかにされた。また、女性として、妻として、夫から認められるか否かは、母親の精神的な安定と育児への充足感を左右する大きな要因と考えられる。母親のそうした精神的安定は、結果的に乳幼児の心理的安定に大きく寄与すると考えられることから、乳幼児をもつ親にとっては夫婦関係の確立のあり方を検討することが今後の課題の一つである。

■ 保健福祉体験学習の効果

親子のメンタルケアを考える上で、日常での生命とのふれあい体験は、思いやりや優しさを育むために大切である。しかし、現在の子どもたちは、常に同年齢のグループ(学校など)に組織されており、家庭をのぞけば、ことなる年齢層の子どもとのふれあいはほとんどない。このような状況の中で、乳幼児にふれたことのない中学生・高校生が増加している。赤ちゃんに全くふれたことがないまま結婚し、親となる人も少なくない。このことが将来の親子関係にどのような影響を及ぼすのかを考える必要がある。

この問題の解決の一途として保健福祉体験学習

が考えられている。

平成3年度より展開された思春期保健福祉体験学習事業は、毎年実施率を上げ、既に10%の市町村で実施されるに至っている。そこで本事業の全国調査を実施し、その評価を試みた。「親性」の涵養という点での効果は高く、本事業の一層の普及により思春期の子供たちへの効果的な支援が可能である。今後は学校教育における家庭科との更なる連携と、本事業を起点とする母(父)子保健の一貫した指導より、より継続的な展開が必要と考えられる。

体験前後のアンケート調査からは、赤ちゃん、育児等に対して拒否的意識から著しく受容的な意識に変化されることが示され、さらに親に対する認識が否定的なものから肯定的なものに変化したことが明らかにされた。これらは、感想文、描画などの分析によっても裏付けられた。

体験学習の実施方法には色々なものがあるが、主流を占めているのは乳児健診に生徒を参加させるものである。しかし、少子化現象の結果体験する生徒に比して赤ちゃん数の少ないことが問題になっている。この点保育所における学習は、効率的であり、また異年齢の子どもにふれあえる利点もあり今後推奨される方法であると思われる。保育所で実施している現状を調査した結果でもこのことが示された。

実施状況の全国調査で、平成7年度に308市町村で行なわれていることが明らかになったが、平成5年に191、平成6年に252市町村で行なわれていたことと比較し着実に増加していることが分かる。実施主体へのアンケート調査で、成果として父性母性の涵養、生命の大切さの理解、育児知識の普及をあげている。また、問題点として、参加者数が少ないこと、学校の無理解、連絡調整の困難などが示された。

赤ちゃんふれあい体験学習は、豊かな人間性の涵養と母性父性の育成に効果的であり、乳幼児・母親とのふれあいを通して男女の性・生命の大切さを知り、思いやりの心を育み、感性の豊かな人間育成の一助となると思われ、この生徒たちが後年育

児を実践する際子どもの情緒形成に効果が現れると思われる。このような体験学習を意図的に企画し、推進していくことには、大きな意義がある。

■ 1歳6か月児健診における「応答の指さし」確認の意義

1歳6か月児健診において「応答の指さし」確認の意義は、その後の言語発達ひいては精神発達を予測する上で重要な指標の1つであることが既に明らかである。一方近年、知的障害を伴わないが、さまざまな集団適応行動を主訴として受診する児童が増加しているが、その多くは乳幼児期において、対人関係の希薄さを疑わせるエピソードを有している。しかし精神遅滞や広汎性発達障害が疑われる程の状態ではないとして、幼児健診では見過される場合が多い。今回「指さし行為」の有無だけではなく、対人関係の深まりを知る上で、より有効であろうとの仮説の基に、「指さし行為」の機能の1つである「応答の指さし」に着目し、1歳6ヶ月児健診においてその有無を確認した。無いものについて二次健診を行い、対人関係の希薄が確認される児には、発達教室への参加を促し、まず母子の愛着関係を強化することに努めた。その結果「応答の指さし」が発現し、対人関係の希薄さを思わせる症状が消失した。

■ 研究の総括

幼児期の情緒の形成に家族の共感性、特に母親の愛他心、道徳観、向社会性が大きな影響を及ぼすことが明らかにされた。また、温かい母子関係の重要性も指摘された。そのなかで、育児困難、育児不安の多いことも示された。育児をとりまく環境の改善が要求されるわけであるが、これらの解決策として父性、母性の涵養があげられる。思春期体験学習はそのための方途として極めて有効であることが明らかにされた。父性、母性豊かな両親に育てられることで、十分な情緒が形成されることになる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要 約

子どもの温かく豊かな情緒形成には、母親の「愛他真」、「向社会性」、「道德性」、「良心」などが大きな効果を有することが認められた。しかし、育児困難のために子どもとの共感をもちえない母親の多いことが示され、この問題解決の必要性が示唆された。思春期保健福祉体験学習が父性母性の涵養に効果的であることが明らかにされ、将来親となる思春期世代の育成によって、次世代の子どもの情緒形成に貢献すると思われる。また、対人関係が希薄な子どもの早期発見に1歳6か月時の健診における「応答の指さし」の測定が有効であることが示された。